

『基礎からまなぶ 経済学・入門』（有斐閣アルマ）正誤表

◎ 誤りを赤字で、正しい記述を→の後に示しました。

第1章

27 頁 下から7行目 「…その第一が式(12)の右辺第一項で、…」 → 式 (10)

一番下の行 「これが (12) の右辺第二項に現れています」 → (10)

下から6行目～9行目 「(もちろん嘘が発覚しない取引と……仮定するわけです。)」 → 削除

※ 理由は表 1-1 のペイオフ行列を見ていただければ分かるように、正直者との取引が成立すれば、相手が正直者であれ嘘つきであれ、相手は1だけの利得があるからです。つまり () 内の記述とペイオフ行列の仮定が、このままでは矛盾しているのです。ちなみにここを修正すると、式 (12) の左辺第一項は0となり、「嘘つきに合う頻度」×「嘘の実現利益」だけが残ります。しかしこの値は正ですので、結論には変わりありません。

31 頁 上から13行目 「c) 「嘘」の儲けが小さいほど(「嘘の実現利益」/「正当な交換利益」)の後に以下を挿入 → 「(表 1-1 を参照すると、この値は1をとりますが、ここでは「嘘」を言うことには心理的な負担がかかると仮定しましょう)」

第2章

52 頁 上から10行目 「乗用車ローン支払い=250万円×(1.25)÷…」 → 1.24

第3章

73 頁 上から7行目 「パレート改善を持たない」 → 「資源配分をパレート改善しない」

81 頁 上から12行目 「第二項の | | の中は」 → ()

第4章

101 頁 上から1行目 「A 英語はアメリカ人 (A) が」 → 「A 英語はアメリカ人が」

上から10行目 「(…; J 英語: A 英語での A の利得)」 → 「(…; A 英語: J 英語での A の利得)」

上から12行目 「(…; J 仏語: A 仏語での A の利得)」 → 「(…; A 仏語: J 仏語での A の利得)」

上から16行目 「(…; J 英語: A 仏語での A の利得)」 → 「(…; A 仏語: J 英語での A の利得)」

上から17行目 「(…; J 仏語: A 英語での A の利得)」 → 「(…; A 英語: J 仏語での A の利得)」

126 頁 下から5行目 「具体的な計算は第5章で」 → 「第9章」

第5章

143 頁 5行目 「(この話は第7章で詳しく議論しますが)」 → 第8章

145 頁 図5-3 縦軸切片の b → 横軸切片に移動

第7章

169 頁 上から2行目 「そこでは数学付録で」 → 「そこで数学付録で」

185 頁 下から6行目 (6) 式の左辺 $U(x^*, M, p^*x^*) \rightarrow U(x^*, M; p^*)$

下から4行目 (7) 式の左辺 $\Pi(x^*) \rightarrow \Pi(x^*; p^*)$

186 頁 上から6行目 (8) 式

最左辺第一項 $U(x^{p_0}) \rightarrow U(x^{p_0}; p)$

次の左辺 $u(x^{p_0}) \rightarrow u(x^{p_0}) + M$

右辺の $u(x) \rightarrow u(x) + M$

187 頁 下から7行目 (11) 式のうち一番下の式 $>u(x) \cdot C(x) \rightarrow =u(x) + M \cdot C(x)$

第9章

243 頁 上から1行目 「実質貨幣残高 M_{t+1}/M_t は、 P に影響を与えず M の変化に比例…」 → 「実質貨幣残高 M_t/P_t は、 P_t に影響を与えず M_t の変化に比例…」

250 頁 上から3行目 「(価格が貨幣あまりで変化しないこと)」 → 「(価格が貨幣数量によって変化しないこと)」

256 頁 上から13行目 「売り上げ名目賃金」 → 「売り上げ一名目賃金」

第10章

265 頁 下から4行目～3行目 「生み出してしまう。これは有力なインフレ要因である。また耐久消費財データを……」 → 「生み出されてしまいます。ゴードンはこれを有力なインフレ要因であると考えました。さらに耐久消費財データを……」

以上

2010年4月29日現在